

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版

B6判
三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思ひなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

季刊 連句 第35号

平成三年立机式特集号



水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典
日本の季節にまつわる言葉やスモッグ、不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈

国語学大辞典 B5 一六〇〇〇円
国語慣用句大辞典 A5 六八〇〇円

国語慣用句辞典 A5 六八〇〇円
国語史辞典 林巨樹他編 B5 三三〇〇円

日本語語源辞典 堀井幸以他編 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B6 二八〇〇円
隠語辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

近世上方語辞典 A5 一六〇〇〇円
花柳風俗語辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

難訓辞典 中山 隆雄編 B5 二二〇〇円

名乗辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

名数数詞辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

あいさつ語辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

新ことば遊び辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

類語辞典 鈴木 庄太郎編 B6 二二〇〇円
類義語辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円
表現類語辞典 堀井 実典編 B6 三三〇〇円

季刊連句 第35号 目次
平成三年立机式特集号

立机式雑感（南柏雑記 33）	1
立机三宗匠の略歴と紹介	2
三宗匠捌による歌仙三巻	4
賛・新宗匠	6
羅浮亭正江宗匠……草間時彦・加藤慶二	
行々子庵平朗宗匠……水澤魚乙・木村聖哉	
桃径庵和子宗匠……近松寿子・品川鈴子	
挨拶 秋元正江・杉江平朗・式田和子	9

恋句の作り方味わい方	東 明 雅	10
------------	-------	----

第十一回俳諧芭蕉忌	第三十九回 猫養会	18
正式俳諧興行	脇起り二十韻 捌 式田和子	
二十韻八巻	捌 金久保淑子・蒲原志げ子・小林 千雪 篠原 達子・瀧川 雅代・八角 澄子 本屋 良子・山口みづゑ	

「養虫」付勝練習二十韻	22
「房連庵の連句」について	福 井 隆 秀 24
歌仙 萩の風	捌・文 式 田 和 子 26
第三回全国連句新庄大会	文 秋 元 正 江 28
雁帛往来	29
新刊紹介	21

A・C・C連句講座(実作と理論)は、昭和五十六年四月に誕生した。正確に言うならば、当初の講座名は「連句・作法と鑑賞」であった。月二回、水曜日の午後一時から三時までは、この十余年間ずっと変わらない。

次の年には、「芭蕉七部集鑑賞」という講座を午前十時から十二時まで設け、午後は一時から三時までを「連句実作入門」と、二本立ての講義をやったこともあった。午前の講義が終ってすぐ四十九階のお店に行き、皆で昼食を仲よく食べた思い出は楽しいけれども、午前の講義が何かの都合ですこし遅れると、食堂は混んで来て、やっとの思いで昼飯をすますというようなことも度々であった。当時はまだ若いと思っていたからよく頑張ったものだが、聴講された方はさぞ御苦勞されたであろう。そして、いつしか現在の形、二時間のうち、初めの一時間は私の講義、そして続く一時間は秋元講師の実作というスタイルが完成した。

一方、猫養会は昭和五十七年四月の発足である。毎年四月・七月・十月・一月の四回、一回も欠かしたことなく、いろいろの行事をして来たことは、「季刊連句」第二十四号の秋元さんの文章「猫養会おぼえ書」に詳細に記録され

ている通りであり、ことに昭和六十一年十月からは正式俳諧の興行に踏み切り、秋は芭蕉忌を、春は亀戸天神藤祭りをつとめていることも皆さん御存知の通りである。

私は昭和三十六年に、信州松本で根津芦丈先生に教えを受けて以来、先生の素志をつぎ、正しい俳諧を世に弘めようと念願して来たのであるが、十一年前、柏に住んで、A・C・Cの講座をひらき、猫養会を作って教えるようになってから、いささか斯界に貢献し得たであろうと思うようになった。

そして、それとともに、この十年余、A・C・Cや猫養会において、連句の神髓を体得し、他人様に対しても教えることの出来ると認められ、会の発展に寄与された方々に對して、何かその顕彰と感謝の気持ちをあらわしたいと考えた末、まずはじめに秋元正江さん・杉江杉亭さん・式田和子さんのお三人に文台を差し上げようと決心したのが、今年の四月のことであった。

幸いに皆さんの御賛同を得、猫養会主催、猫養同人会後援で、盛大に立機式が挙行されることになっているのは、大変うれいことである。立機式事務局の中川哲さん、豊田好敏さんをはじめ、すべての猫養会員の方々に厚くお礼を申し上げ、兼ねて、立機された新宗匠お三人が、今後さらに会員と協力され、猫養会の発展、ひいては正しい俳諧の普及の先導となられるよう期待するものである。

平成三年立機三宗匠の略歴と紹介 立機式実行委員 文責

羅浮亭正江宗匠



本名 秋元正江
住所 東京都足立区綾瀬
四ノ一九ノ一七ノ二〇九
電話 〇三三六二八一五〇七八

東京生れ。都立第一高女卒業。都立第五専攻科中退。昭和四十九年、朝日カルチャーで加藤楸邨先生のご指導をうけ、平成二年「寒雷」同人。

朝日カルチャーセンターで東明雅先生の「連句の実作と理論」の講座が始まると第一期生として入門。十一年のキヤリアから、今では明雅先生の片腕となり、同センターの講師として実作の指導に当たっていられる。そして「猫養会」

行々子庵平朗宗匠



本名 杉江平朗
住所 東京都三鷹市井の頭
二ノ二六ノ三〇
電話 〇四二二一四四一五九〇五

愛知県生れ。早稲田大学卒業。大企業の広報担当として活躍。その頃の人脈が平朗宗匠の今日を、より一層豊かなものにしていくといわれる。

連句歴は約十年。「猫養会」「猫養同人会」の顧問。昭和六十二年に連句集「井の頭」を出版。赤い表紙のシャレ

た作品集である。
 実作においては、かつて「脇」の、杉亭さん、と持て囃されたことがあった。発句を見据えて付ける勘所が、ひときわ群を抜いておられたからとか。
 杉亭と号されたいきさつは、杉山杉風と渋沢洪亭(秀雄)両氏の罨みに倣ったと承ったことがある。
 行々子庵宗匠で欠かせないのが酒と旅行。酒はあくまでも年間を通して日本酒の冷。肴は和風をもって可とするが、

鶏と蕎麦とは酒に付かぬと採っていただけない。旅行は諸外国の名だたる国はあらかた訪ね、国内は歴史ある街の由緒正しい和風旅館がお好みである。
 そして隠れたご趣味がなんとスポーツ。水泳はかつて遠泳に自信がおありだったとか。今は近くのスイミングクラブで気ままに泳がれている。そしてスキー、スケートも昔の話、今ではもっぱら深夜テレビで、テニス、ラクビー、ゴルフの世界タイトル戦を楽しんでおられる。



桃径庵和子宗匠

本名 式田 和子
 住所 東京都杉並区桃井

電話 〇三三三九〇一四四四六
 二ノ一四ノ五

東京生れ。府立第三高女卒業。二男、一女。昭和四十四年大宅壮一マスコミ塾に入り、六期を終了。以後、婦人誌等で、生活、冠婚葬祭、老人問題等の評論を手がけている。著書に「現代日本婦女鑑」(婦人生活社)「しきたり救急箱」(扶桑社)「女性のための冠婚葬祭入門」(三笠書房)「老人の看護をした主婦の話」(おばあさんの暮し今・昔) (共に文化出版局) 他多数。主婦の投稿生活情報誌「月刊」

くらしの研究」編集長。
 連句歴は約十年。「猫賣会」「猫衰同人会」理事。「連句協会」理事。福井隆秀、秋元正江氏との連句集「文音往来」を昭和六十年、むなぐるま草紙同人社から出版された。実作においては、博覧強記の脳髓から、ある時は格調高く、ある時は俗語や日常語を自在に駆使して、独特の軽妙な気分にかけていくという妙手である。
 連句のメカニズムは付けと転じであると明雅先生は断言されます。桃径庵新宗匠は広い交友範囲を持ち、ママさんバレー、歌舞伎、舞踊関係者、雑誌編集者、千社札愛好者等多士済々で、その人々をいつの間にか「連句」に付け、愛好者に転じさせてしまう、という特技の持ち主である。

三宗匠による歌仙三卷

祝立机

羅浮亭正江捌

色も香も紫式部か小式部か
 俳諧照らす月の晃々
 江鮭煮つめてをりし箸先に
 じゃんこの眼して遊ぶ子供ら
 羽根二つ三つ庇に残りあて
 ショールまとへば遠き潮の音
 胸の傷癒さんとして発ちし旅
 浮気の虫がちよっかいを出す
 うら若きお寺の僧は茶枳尼天
 現代宗論使ふファックス
 のど越しの良き「菊姫」を呑み過ごし
 佐屋の中山水鶏きく夜
 着陸の車輪すれすれ夏の月
 会員権は紙くづと云ふ
 やけ食ひを遂に許せしダイエット
 歴代天皇名を諳んずる
 御衣黄も爵金も花の通り抜け
 海市の果に笛方の座す

明雅 郁子 正江 千恵子 千町 蓼子 弘子 水壺 町 恵 郁 雅 艸 久 弘 恵 雅 艸

秋の聲

行々子庵平朗捌

杉木立亭々として秋の聲
 端座して待つ端正の月
 初獵に鳥屋の網戸を直すらん
 尾を振りながらついてくる犬
 打水の路地賑やかに遊ぶ児等
 苺ゼリーを口にすると
 ポプリの香アールヌーボー美術館
 君の名はとは聞けぬくやしき
 「西施」てふ銘柄運び酒を酌み
 日本海側沿線の旅
 五平餅朴葉味噌飛騨訛
 ビデオショップで借りる新巻
 クリスマスキャロル唱へば月の射し
 寒の修行の僧の列ゆく
 筆便り達筆金釘とりどりに
 借用証の溜る抽斗
 もてあます迷子に花の駐在所
 山脈遠く聞きし春雷

志げ子 杉亭 好敏 淑子 道子 満子 淑 同 敏 道 志 満 道 志 良子 道 敏 志 敏 淑 敏

あけび紫

桃径庵和子捌

喜の色のあけび紫たぐりけり
 路地爽やかに客の挨拶
 後の月厨の音も賑やかに
 Sのかたちに背伸びする猫
 湖の細き小橋に佇みて
 紙漉き工場求む学生
 嵩高な歳暮の品の届けられ
 値踏み腕は今もしっかり
 下町の女形張りたる目千両
 簪かくす坊主煩惱
 この頃の機械に弱くためらひて
 健康ブーム低き飛び箱
 魚梁打ちの銀鱗に月照らすらん
 源氏螢を追ひて沢道
 「重大な決意」で落ちた臨し穴
 携帯電話便利重宝
 花の間ぼっかり泛かぶ熱気球
 野外教室つららつららに

和子 健悟 一恵 澄子 哲 好敏 志げ子 恵 悟 哲 志 澄 敏 恵 哲 敏 澄 悟

かいらぎを撫でてさすって暮の春

思ひがけなき人賞の沙汰
親族を呼んだものやら枕元

障子の隅にさしきわらしが
この指の先まで恋しき人ありて

至福の刻は一枚を剥ぐ
徒らに年を重ねし司召

蝦夷地にはただあ秋あかね
月読のサイロに続く道はるか

マロン選手さげし十字架
踏まれたる綿の財布を拾ひたり

ふうはりとくる薄翅蜉蝋
マネキンは積み上げられて夏野ゆく

河馬の肉買ふスーパ一の地下
文庫本の論語に学ぶ処世術

清掃をする名無き裏山
初花にパイプオルガン復元す

凧高々と少年の夢
平成三年十月六日

於 関口芭蕉庵
連衆 東 明雅

武田千恵子 東 郁子
川野 夢艸 原田 千町

今宮 水壺 市野沢弘子
上月 淳子 山田 和久

壺 黄塵の港出でゆくフルセル

郁 ニッカボッカの好きな伯父様
町 伯母様は近頃流行る霊能者

雅 平身低頭狙ふ宰相
弘 腹当をして腹芸の腹見えず

恵 からくり人形組みし祇園会
壺 りえちゃんあの黒子こそ惚れ黒子

久 あんまりよ夢中にさせてそれっきり
艸 ポッシュの中秘めし合鍵

弘 競馬競輪又も大損
久 長々と続く高塚格子月

雅 西瓜を買ひにベントツ転がし
艸 来し方は遊糸に似て定めなく

弘 ぱちりぱちりと碁石置く音
町 割り込みの電話に困る時ありて

壺 踏むな摘まむな小さき物の芽
江 白寿翁描く醍醐の花大樹

江 静まる部屋に揺るる春灯
平成三年十月十八日

於 鎌倉おうめさま
連衆 蒲原志げ子

金久保淑子 豊田 好敏
田村 満子 加藤 道子

本屋 良子 本屋 良子

淑 子等寄りて飾る若駒売られゆく

敏 スマタナの「我が祖国」CD
志 血に飢ゑた下士官は剣つきつける

満 凍てし屍にひしと口づけ
道 八回め年の差なんぞ忘れ果て

敏 はるか野面に夏の鴛鴦
同 ぐるぐるとかレイン廻り造成中

淑 煙草のみつつ婆の繰り言
満 看護婦のお尻さすって爺にやり

道 倫敦に記念興行大相撲
道 たぶたぶ揺れる混浴の月

敏 夢の倍率籤のすさまじ
志 神妙に叙勲お受けす紋服で

淑 ※山廃仕込み喉ごしのよき
志 ワープロでこなす稿債文机に

道 薄き埃の流る逆光
道 雛会式古き雛の花に映え

満 自転車置いて春の堤防
平成三年十月十三日

於 式田家
連衆 佛淵 健悟

八角 澄子 山崎 一恵
豊田 好敏 中川 哲

蒲原志げ子

With Love From Tsukuba

加藤 藤 慶 二

(筑波大学教授・ドイツ文学)

黄・羅浮亭宗匠

お祝

草間時彦

立机、おめでとうございます。日ごろのご努力が
実ったわけで、よかったですね。

しかし、ちょっとばかり気になることがあるので申上げ
させて下さい。

立机という古典の様式を、現代とどのように調和させる
かということが気になるのです。連句が現代に生きる文芸
であり、現代人の詩であるならば、矛盾することはないか。
矛盾という大げさですが、キシミが生れるのではないか。
そういうことが気になります。そんなこと余計な心配とお
っしゃりたいでしょう。どうなのでしょうね。結局、その
キシミは作者の心の裡の問題なのです。秋元正江という作
家にとって、そのキシミをどう受取るかということが、私
は興味があります。

連句という詩ではまだまだ、いろいろな試みが出来る未
来性があるように思っています。そのためには、もっとも
っとキシミが生れてもよいでしょう。

お祝いが意地悪い言葉になりました。あなたを尊敬すれ
ばこそです。お宥下さい。

秋元正江さんが十二月八日、東明雅先生より立机式をし
ていただくことになった由。「連句辞典」によれば、この
式は「専門的職業人(業俳)として認められる」とある。
ドイツの大学制度で言えば「教授資格の授与」であろう。
もとより新宿朝日カルチャー教室での講義を受ければ、授
与式はむしろ遅過ぎたのではなからうか。しかし連衆の一
人としてこれ程嬉しいことはない。

秋元さんに最初にお目にかかったのが十余年程前の初夏、
俳句文学館で東先生が捌かれた歌仙の六句目に付けられた
辰砂の壺に露のこぼるる

が私のノートに記されている。その後、関口にある芭蕉庵
や、また猫養小旅行や、或いは宴席で一緒に居るが、この
掲出句程、俳諧師秋元正江さんを語っているものはない。
深奥に秘めたるものを燃やしつとも、表現は静かに謙抑に
述べる。そしてその端正な姿勢は決して崩れない。そこに
なら頼むべきものはなく奉仕すべきものもないことを自
覚された詩作への批判的精神が自己自身に確固たる根拠を
おいて出発している。

ドイツ語圏では現在「ハイク」が盛んである。「レンク」
はまだ先のことであろう。しかし明雅門下からの新しい「師」
が更に連句を広め、やがて世界文学になることを念じつつ
秋元さんに心から拍手を送りたい。

宗匠庵子々行

「半可仙」からの出発 水澤魚乙

杉江杉亭さんとの付き合いももう二十年の上になる。はじめは仕事上の付き合いだったが、そのおおらかな人柄と、趣味の深さに魅かれ、いつしか親しく深い付き合いとなった。

さて、十年前の春のある宵、杉亭さんと僕はなじみの酒亭で呑みながら、半歌仙を巻いた。杉亭さんはその時が連句についての初体験であり、僕にしては式目といえ月と花の定座くらいしか知らず、また、酒の上でもあったから、ものすごいスピードで乱暴至極な連句を仕上げた（僕はこれを半可仙と名付けた）。しかし、その乱暴な丁々発止の面白さが、杉亭さんに連句への強い傾倒を呼び起こしたのは、怪我の功名のようなものだ。

やがて杉亭さんは斯界の碩学、東明雅師に入門、蕉風にのっとった研鑽を重ねられ立派な捌き手として立つようになった。その句風はあくまで正格でありながら、底にやや江戸風の軽みを帯びる。杉亭さんは尾張の人だが、大藩の江戸留守居役という、いとも風流な役柄にあこがれておられ、江戸趣味の持ち主なのだ。あるいはまた、名の似ている杉山杉風にあやかるとお気持ちがあるのかもしれない。また、悠然たる気風は犬山の人、内藤文章をも思わせる。

この度の立机のこと、まことにおめでたい限りで、僕のような相変わらずの半可通から見れば眩しいようなことが、一層のご研鑽をと念じ蕪辞を連ねた。

杉亭さんは老後の鑑

木村聖哉 (猿楽座)

杉亭さんが私たちの句会（猿楽座）に初めてお顔を見せられたのは一九七九年八月、岐阜県郡上八幡への吟行の時でした。まだ会社勤めをしておられた頃です。

以来、杉亭さんは俳句・連句に取りつかれて、正式に勉強をされ、定年退職後は句作三昧の生活に入られました。見事な老後だと思えます。

私たちの句会ほどの結社とも関係がなく、毎月一回焼酎を呑みながら雑談を楽しみ、やおら句を作って遊ぶといふかなりいい加減な会です。傾向としては有季定型が主流ですが、シュールな句や山頭火もどきの句を詠む人もいます。そこへいくと、杉亭さんは全くの正統派で、いかにも俳句らしい姿のいい句をお作りになる。

ガウディの巨塔かすめる冬鷗

この句は数年前、猿楽座の年間最優秀句に選ばれました。私も大好きな杉亭吟です。

但し、御本人は俳句より連句のほうが得意だとか。たしかに句の付け方など抜群にうまいですね。

今回、東明雅先生から連句の免許皆伝のようなものももらえる由、まことにおめでとうございます。どうか喜びの余り、御酒が過ぎませぬように――。

宗匠庵桃径

「徳」の人 和子さん

近松寿子 (茨の会)

或る正式俳諧の座で、きりりと美しい式田和子さんに見とれたことがある。つい先刻まで開会前の慌しさの中で他の連衆の帯や袴の着付をまめまめしく手伝わられての後だった。

和子さんとはあまりお会いする機会は無いのにお会いすれば何時も大きな励ましを頂くような気がする。

昭和六十三年四月、連句懇話会関西大会の前夜祭席上、その日の俳蹟めぐり等を殊のほか喜ばれ、同行の猫蓑会の諸雅を紹介しながら「こんなに楽しい会なら次回はもっともっと猫蓑の連衆を大八車に乗せて大挙して参加します」とユーモアたっぷりのスピーチで拍手喝采を受けられた。司会・世話役で大重だった私は疲れも吹き飛ばされた。平成元年九月の新庄大会では、指定のバス1号車へ急ぐと、それは猫蓑の皆様が大勢のバスだった。遠慮がちに乗り込むと和子さんからお声が掛かった。「寿子さん、巻いている連句が丁度花の座なの。明雅先生も賛成して下さったし、さ、花を」と巻き進められていた懐紙を廻して下さった。茨の会から同行の清水一興は続けて挙句を付けさせて頂き、連句は初心で他の会との交流も初めてだったのに猫蓑の皆さんとはすっかり仲良しになってしまった。

和子さんは得難い「徳」をお持ちの方と思う。その和子さんの栄ある立机を心よりお祝い申し上げます。

智恵袋

品川鈴子 (ひよどり・白燕)

式田和子様は江戸情緒そのもの。――優雅で、粋で、繊巧、洒脱、そして斬新。関西者には及びもつかぬ気風よさ等々。

その方が猫蓑会初回の立机を許されて、江戸時代よりの栄ある伝統にふさわしい。彼女こそはおのずから女宗匠の風格を備えて居ることは、数ある著述からもうかがい知れる。「……幼い頃、先人からしっかり教え込まれた暮し方は、身体がピシッと覚えていて……手を動かした時代の血の因果が必ずあると信じます」と、或る序に述べている通り、佳き習慣や躰をさりりと身につけて居られる。

そして、こと正式俳諧式などあれば、すすんで裏方に廻り、誰彼の和装の着付やら、袴の紐の飾結びまで、苦にせず一手に引受ける。その上本人は、手早く端正に紋付袴を召して、執筆の大役を堂々とやっつてのけられる。

真の才女は、相手を気詰りにさせない。其後執筆役を式田様に見習い、私もさせて貰ったが、その折には、病後のお体をいとわれず着付はじめ万端をお世話下さった。小心な私は、あがらぬため連句マスケット（東先生と初対面の日に拾った小人形ゲゲのキタロ）を袂にひそませた。それがふと転がり出たのを見ちゃった、見ちゃった」と、おどけてなごませてくれたものだ。刀自というよりは、ゆかしい智恵袋と呼びたい。

立机式・容と心

秋元正江

立机挨拶

杉江杉亭

EN・えん・縁

式田和子

A C Cで加藤楸邨先生に七部集の講義を伺い早速数人で実作の真似ごとで二巻を巻いたのが連句の出会いで、東明雅先生の連句講座が開かれて以来十年余、連句と共に過ごしてきた歳月でした。

この秋の芭蕉忌正式俳諧で執筆をつとめられた久美子さんは、その出から硯を捧げて席に戻られる迄、一幕の張りつめた舞台を見るようでした。容は修練と工夫の積み重ねの上にあるもので、それに心を添えられて、存じ上げてない部分の久美子さんを引き出して見せて頂けたように思います。

立机式は、執筆、宗匠のお役と共に遠い古典の世界のことでしたが、この度ご指導頂きました明雅先生から頂けますことは、生涯の喜びでございます。これからも一層精進してまいりますと念じておりますが、連句を巻きますひとときは、容ない人生の最良の喜びではないでしょうか。

私と連句との出会いは十数年前、畏友水沢氏との新宿のバーの止り木から始まった。半可通の半可仙は苦吟数刻、水戸天狗党が出たかと思へば天の夕顔の面影付あり、客気に逸った付けの数々は今から思へば汗顔物ではあるが貴重な記念作品として今も手許にある。

昭和五十七年会社を定年退職し、一自由人として朝日カルチャーの「連句入門」講座に入り東明雅先生とのご交誼が始まった。

某年某月先生のお伴をして調布に赴き歌仙一卷を巻いての帰り途、小料理屋でまた一卷、今回は一時間で巻きましようということになり、先生を捌に男女六名の連衆、必死の形相物凄く一時間五分で満尾。その時、声あり「先生これはギネス物ですね。」

あの頃先生もお若かった。連衆もまた。今度立机式を挙げて頂くに際し、東明雅先生を始め諸先輩の方々のご協力を深謝し、これを一里塚に精進に励む所存である。

「あなたもA C Cに十年通ったから」明雅先生はお電話でこう切り出されました。私は心臓がひっくり返りました。

「もう、こなくていいよ」
「だったらどうしようー」
それが思いがけない立机の有難いお話でした。

よく、連句の「れ」の字も…などと申しますが、連句・れんく・RENKU。この「れ」の字の「れ」に至らない「R」を学ぶのに十年かかりました。ですから、もってお習いしないと困るのです。せめてあと十年かかって「E」の字までいって、もう十年生きていたら「N」までいきたい！これが私の願いなのです。

連句との縁でこそあれ末かけて(蘭蝶)約束習い句を磨きたい、との願いを新たにされた立机のご沙汰でございました。先生始め皆様様、どうぞENまでお付き合い下さいませ。有難うございました。

恋句の作り方味わい方

東明雅

一 連句の本質としての恋句

連句の歴史を溯って行くと、歌垣(嬭歌)というものに到達するというのが、学界の定説である。

歌垣は古代、春・秋、季候のよい時、若い男女が山野に集まって、互に歌を詠みかわし、舞踏して遊んだもので、常陸風土記にある筑波山の嬭歌など、最も有名である。

もともと、筑波山は伊邪那岐命を祀る男体山、伊邪那美命を祀る女体山から成り、関東から遠望して向って右が女体山、左が男体山で、この男体山の南下に連歌岳があり、日本武尊と火焼の翁の間に交わされた。

新治、筑波を過ぎて幾夜か寝つる
かかなべて夜には九夜日には十日を
の応答が、連歌の始まりと言われ、以来、連歌を「つくばの道」というようになった。

さて、この筑波山にある和合の神、縁結びの神である筑波神社の後ろに、「嬭歌」の地が今も残っていて、古代の倂をしのげるものがある。

常陸風土記によれば、嬭歌の夜、男から妻どいの印を買わぬ娘は、女の中に入れないと書かれている。嬭歌の夜は一種の集団見合、集団結婚の夜だったのである。

ところで、この嬭歌における男女の歌のかけ合いは、言語(歌)に靈力を認める、いわゆる言霊(ことだま)の思想がその背景にあった。相手から歌を言いかけられた場合、それに答えられなかったり、答えてもうまく答えられなかった場合には、その相手に従わなければならなかった。それで男女ともに、全身の智力・気力で、即興に相手に唱和し、相手を屈服させることが必要であった。たとえばおのころ島で天の御柱をめぐって行なわれた、伊邪那美・伊邪那岐。二神の唱和、

あなにやしえをとこを(ほんにまあよい男よ)
あなにやしえをとめを(ほんにまあよい女よ)
などは、その典型的なもので、この唱和は5・7・7、5・7・7の片歌の型式をもっている日本武尊と火焼翁の唱和よりも形が古いから、これこそ連歌の祖であるという説もうなずかれ、また、恋の句が連歌の根元であり、中核であるということも、納得されるであらう。

後に連歌の形式が定まり、百韻の式目が定められた時、二条良基(一四二〇〜一四八八)が、
春 秋 恋 已上五句
恋の句只一句にて止む事無念
と定めたのは、春・秋にならんで、恋を最も重視する思

想のあらわれであり、恋句を一句で捨てず、必ず二句以上詠むというのは、例の歌垣において、恋句を詠みかけられた場合には、必ずこれに答えねばならないという言霊の信仰が、良基の時代にも残存していたことを示すものであり、この伝統は言霊の思想が忘れられた今日までも、重要な式目の一つとして、現代連句の中にも残っているのである。

元来、連句はその題材として、天地万物・森羅万象のすべてを詠みこむわけであるが、花鳥風月の自然の描写より、人間の存在・人間の関係、そして人情の機微を詠うところにおもしろみがあり、重点が置かれている。

恋はその人情の中で最も深刻であり、かつ華やかであり、また興味のあるものであるから、連句一卷の中でも、中心となり、いわゆるヤマ場を作ることが多い。連句の一座においても、表六句が終わって裏に入り、そろそろ恋句が出かかる処になると、連衆の気持が頓に昂揚して、出勝の席ならば、皆が争って出句し、一座は急に盛り上がりつつある。このような経験を持たれた方は多いだろうが、これも連句の祖である歌垣の昂奮の名残が、我々の血の中に残っているからに外ならない。去来抄に「恋の呼び出しの句が出されると、相手は恋をしかけられましたと挨拶して、恋の句を出すことになっていた」というが、これも、はっきりと連句の恋の句、そして連句そのものが、歌垣の伝統の上に立っているという証拠である。

二 お手本としての芭蕉の恋句

やがて散ってゆく、飛花落葉の無常の相と全く変わるところがない。そして、花や紅葉が美しければ美しいほど愛惜の情が深いように、女性が美しければ美しいほど、その衰亡に対する感慨も深いもので、その哀憐の情をさりげなく句にあらわすところが「しおり」なのである。

「浮世の果は皆小町なり」という句は、女性すべてに對する深い同情と愛惜があふれ出た「しおり」の句であると言つてよい。そして、この溢れ出る哀憐の情によって詠まれる恋句は、興味本位なおもしろ、おかしな心をもつて恋の諸相を詠んだ、あるいは恋の詞だけを集めて作られた貞門・談林時代の俳諧の恋句とは違って、どのような卑俗な、あるいは好色的な素材を詠んだものであっても、その裏に深い感慨・観相がひそみ、「あわれ」・「しおり」が読む人の胸を打つのである。この「しおり」(おのずと滲み出る哀憐の情)が、芭蕉の恋句の第二の特色なのである。

のた打猪の帰る芋畑

賤の子が待恋習ふ秋の風

山の猪が夜になると出て来て芋を喰ひあらし畑にころげまわっては帰って行く、そのような辺鄙な山里、過疎地帯に住む村娘の恋を、その生活環境に即して描いているが、彼女の恋人はなぜ現われなかったか、それからその娘はどうなったか、それらをいろいろ想像すれば、優に一篇の小説を書くことができるだろう。

あやにくに煩ふ妹が夕ながめ

越人

芭蕉

芭蕉の恋句は、現在残っているものだけでも四〇〇前後あるが、それら芭蕉の恋句の性格を最もよくあらわした付合がある。

さまざまに品かはりたる恋をして

浮世の果は皆小町なり

凡兆
芭蕉

これは元禄三年(一六九〇)に作られ、「猿蓑」の中にも収められた「市中は」の巻に出ている有名なものである。この付合が芭蕉の恋句の性格を見事に表現している。

それは、まず第一に、芭蕉の恋句は、すべて、「さまざまに品かはりたる恋」を述べたという点である。貴族の姫御所勤めの女房などから、人妻・尼・織女・農家の娘・炭焼の娘・商家の腰元・問屋の少女・さては遊女、乞食女などにいたるまで、貴賤上下、ありとあらゆる階層の、さまざまな境遇・年令・氣質の女性たちである。

これらを取り上げ描いている点に、彼の恋句の第一の特色がある。

次に、芭蕉の文芸における究極の立場について、彼の門人服部土芳は「三冊子」の中に、「師の曰く、乾坤の変は風雅の種なりと言へり」と述べられている。乾坤の変とは天地・自然、万物の変化、流転する相で、これが俳諧の種(素材)だということである。とすると、人間の愛欲・煩惱の諸相を写す恋の句も、つまりは乾坤の変の一つであり、女性が生まれ、盛りの年頃になり、さまざまの体験をしたあとで、やがて年を取り、老い衰えて死んで行く、それも変化・流転という点から見れば、花が咲き、木の葉が茂り、

註釈書の多くは、この付合を源氏物語の夕顔のおもかげと見ている。芭蕉の恋句には、このように、源氏物語など、その他平安時代の物語のいろいろな人物・場面が取り入れられ、恋の描写・感情を複雑にしている、そこには平安朝物語文学の「艶」とか「物のあわれ」などが感じられる。

以上、二つの例を通して考察したところだけでも、芭蕉の恋句は、貴賤・上下、さまざまの時代・階層・境遇の「さまざまに品かはりたる恋」を素材として取りあげ、これを述べるもので、いわば、それは恋の諸相の叙事化であり、恋を物語化し、小説化したものと言つてよいであろう。

連歌・俳諧における恋句の源流は、大体新古今集の恋歌あたりにあるというのは、もともと百韻連歌の形式が定まって来たのが、この平安末から鎌倉初期のころと考えられるからそれは当然かも知れないが、それだけではなく、当時の歌人の影響もいろいろの面であらわれている。俊成の幽玄・定家の有心体、それらは正徹から心敬へ、心敬から芭蕉に伝わっている。たとえば定家の云う親句・疎句という考え方が、芭蕉では余情付、(匂ひ、うつり、ひびき、位)となつてあらわれたと私は考えている。

しかし、このように、平安末期の恋歌の伝統を取り入れて、「艶」の美を完成させた芭蕉の恋句も元禄三年あたりを頂点として、変化してゆく、それは「おくのほそ道」の旅の中で彼が考えた「軽み」という手法(日常の具象化を通じて人生を表出する手法)が、恋句の中にも浸透してくるからである。もちろん、「さまざまに品かはりたる恋」

を取り上げて、その諸相を描くという基本的態度に変化はないけれども、今まで親しかった古典の世界・和歌の世界から離れ、今度は庶民の生活の中からさまざまな恋を拾い上げようとする。俳諧は「新しみ」が生命で、俳諧師は常に「新しみ」を追求しなければならぬ。芭蕉が「軽み」を提唱したのも、この「新しみ」を求めてのことである。

ふすま欄んで洗ふ油手

嵐蘭

掛け乞に恋のこゝろを持せばや

芭蕉

馬に出ぬ日は内で恋する

野坡

このような晩年の彼の恋句は、題材・表現ともに、庶民の生活・用語をそのまま取り入れ、全く俗の世界であり、好色的な要素もある。これが「軽み」の世界の恋である。

その市井における「さまざまに品かはりたる恋」を取り上げながら、それを乾坤の変と見、飛花落葉と観ずる精神が背後に存在した。同じく、町家の腰元、宿屋の下女、それらの恋を描きながら、談林俳諧が、「おかし・なぐさみ」と見たものを、蕉風俳諧では、「あわれ」・「しおり」(人間を哀憐をもって眺める心)の心をもって眺めたのである。芭蕉は晩年、このことを「高悟帰俗」という言葉で表現している。

右の付合も表面的には、いかにも野卑・露骨である。しかし、芭蕉はこの野卑・露骨な恋を描くことによって、この馬子の全生活を描し、そこにユーモア、「あわれ・しおり」をも感じさせているのである。

三 現代恋句の作り方

次に私は根津芦丈先生から教えていただいたものをもとにして、現代連句において恋句を作る場合の心得について、すこしお話ししてみたい。と申しても、大体は今まで話して来た芭蕉の恋句から外れたものではないが、その前に一つ考えなければならぬことは、芭蕉の時代からまさに三百年、その間、社会・文化の変化は大きく人々の恋に対する意識もまさに百八十度転換していることである。

芭蕉の住んだ封建社会は、その制度維持の目的から、男女の自由な恋愛を否定し、男性支配の下、女性を家庭内にしぼりつけ、女性は子供を生み、それを育てる道具として、一個の独立した人格として認めていなかった。

明治以後、ことに第二次大戦以後、旧い社会とともに残存していた封建的思想が打破され、民主主義の名の下に、個人の自由・平等の権利が拡大され、恋愛・結婚は自由となり、最近では女性の社会進出とともに、その力強さ・逞しさが目立って来ている。

芭蕉の時代には世の常識であり、良識であったものが悉く否定された。「不義はお家の御法度」・「男女七才にして席を同じうせず」・「かよわきものは女」・「女は若い時には親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」・「女三界に家なし」・「貞女二夫にまみえず」とか、さまざまに言い古されて来たものが、現代では全くナンセンス、あるいは逆になって来た。

芦丈

肥桶の片棒かつぐも嬉しげに

この付句ははじめは「嬉しくて」であったが、それでは女の自の句になる。男が女の自の句では蕉風の埒外のものだから一直他の句にした。

即ち、これは恋句には限らぬが、男性が、女性の自の句を作ることはいけないと言われるのである。この問題を取り上げて論じたのは管見によれば杉内徒司氏で、氏は「季刊連句二十号」でこのことを取り上げられ、

翠桃

あの月も恋ゆへにこそ悲しけれ

芭蕉

露とも消えぬ胸のいたきに

土芳

冬至の縁に物おもひます

芭蕉

けはへどもよそへども君かへりみず

などの例をあげて、芭蕉も女性の自の句を付けているから、自分が今まで女性の自の句を作ってきたことに安心したと述べられ、さて、芭蕉が女性の自の恋句を作ったのは、その当時、連衆として俳諧の座に連なる女性の数が現代に比し、極めて少なかった為であろうと推論され、そして、現在では、「一句の主人公は常にへわれでなければならぬ」という波郷の言葉に従って、このような性の倒錯は不可とする説に傾いていると述べておられる。これはまことに妥当な結論であるが、そもそも自分以外のことを自分自身のこととして詠んではならないという教えは、去来抄の中

れ……………」

世の謗りをつゝむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ……………」

という恋の至情は現代でも、そのまま通用するだろう。社会的な時代的なものは違っても、その本質は変化しないから、やはり「しおり」や「あわれ」を見出す場所も多いだろうし、「軽み」の句だって、作るには事欠かないのではなからうか。

そこで、芦丈先生の恋句に関する教えの第一として、先生が山襖二十号に掲載された問題を取り上げることにする。

①男が女の自の句を作ること

篠の厨家も住めば愛の栖

洞光

玉祭うまれぬ先の父こひし

